Dreadnought, Deborah (ed.)

The beauties of Bloomerism.

London, Ackermann, 1852.（文献番号3－188）

ドレッドノート編

ブルーマー服の麗人たち

本書は書誌類にとりあげられておらず、また他の文献でも言及されていない。扉の頁と前書きで、編者ドレッドノートを「女権拡張協会実行委員会」の名誉書記として紹介してはいるが、この人物についても詳しい情報は得られず、そのような協会自体も1852年までに存在したという事実も見当たらない。また挿絵にあたった W. S. Reed というイラストレイターについても編者と同様である。さて本書は、前書き１頁と、それぞれ１頁全体を用いた手彩色石版画の挿絵を伴う１、２頁の詩12篇からなっており、いずれも1851年にアメリカから英国に伝えられたブルーマー服を着る様々な種類の女性を主題としている。

周知のとおりブルーマー服とは、同年、アメリカのフェミニズム運動のある一派の機関紙に紹介された服装で、当時の女性の服装の常識を破り、前開きの上着と足首までの緩やかなズボンを組み合わせた型であった。それは服装の拘束から女性を解放することによって、女性の能力が充分に発揮されることを期して考案されたが、その後１、２年の間、英米両国で賛否両論を引き起こした。その流行は短命であったが、女性史、ないしは服装史上では、意味深い出来事だった。

前書きを紹介しよう。

ブルーマリズムが内に込めたその高貴な主張の使徒達のアメリカからの到来以来、我が国のブルーマリズムは驚くべき進展を遂げ、為に「女権拡張協会実行委員会」がその名誉書記であるデボラ・ドレッドノート嬢に、様々な女性の階層の指導者達の回想録の出版を許可するに至った。これらの指導者達のそれぞれの領域での努力は、全女性が関わり、当然深い関心を寄せている偉大な善き理由によって、等しく感謝と心からなる賛同を得ている。それはこの実行委員会からだけではなく、広く英国とアメリカ合衆国のご婦人方全般からのものである。同委員会は、英国の出版物に対する嫌悪を表明せずに解散することはできない。ジョン・ハムデンが戦場での死を賭し、シドニー・カートンが死刑を賭し、また有名なジョニー・ウィルクスが汚名を着ても守ろうとした栄光ある主義から始まった英国の出版は、それ自身が獲得した自由を、ブルーマリズムの徳高き主張を中傷したり、真実の光りやその道義を弁えた教えが広まるのを怖がらせたりするのに使っており、また我々の議事録の公表を差し控えたり、その細部を卑劣にも差し止めてきた。これらの記事こそ我々の偉大なる道徳と知性と数で表された勢力を、遍く知らしめしたであろうに。しかし同委員会は、〝巨人〟『タイムズ紙』に対してさえも公平な通告を与えている。即ち、女性の権利に好意的な方向へと流れが変わる〝タイムズ（潮時）〟が近づいていると……。委員会の命により。〝デボラ・ドレッドノート〟1852年。

続いてこの前書きに続く12篇の詩の題を紹介しよう。1、最も誉高き麗しの侯爵夫人　2、花の盛りの美女　3、アマゾン　4、それを着た子爵夫人　5、花嫁　6、未亡人　7、講師セリナ・スモールバック　8、都会の貴婦人　9、レディ・ジェーン・スピンスター　10、身持ちの悪い若い女性　11、愛すべき老嬢　12、街の無人販売の愛飲酒。

いずれも脚韻を踏み、主題の女性たちのブルーマー姿を誉め称えているかのような語り口ではある。しかし、詩人は、女性の足首を直接人目に晒し、脚のかたちをも間接ではあるにせよ露にするブルーマー服を、先ず女性のエロティックな手管としてとらえている。何故ならば、それは極端に幅の広いズボンの裾を絞って、足首の細さと足の小ささを強調し、脚部をも間接的ながら人目に晒すからである。故に詩の中の、かっては美しかった（現在については量されている）侯爵夫人、年頃にはついぞ男性の心を射止めることのなかった、いまや老境にさしかかったレディー・ジェーン・スピンター、一人の老嬢などは、ブルーマー服によって突如として若返り、美貌となり、男性の注目するところとなるのである。

次いで詩人は、このズボンとジャケットからなる服装を女権の主張、ないしは男女の立場の転換の意図の露骨な表現として捉えており、馬を巧みに乗りこなすアマゾンのような女性、女性の選挙権の要求を掲げる子爵夫人、乗馬用の鞭を手にして、間もなく夫を尻に敷くであろう花嫁などの詩にそれが最も明瞭に現れている。

また挿絵に目を向けると、詩の中の comely, belle, beauty, lovely などの言葉とは裏腹に、12点のうち9点までが異様なまでに恰幅の良い、肥満した女性、また1点は哀れを催すほどにやせ衰えた女性を表しており、この10人の絵姿は今日は勿論、当時のいかなる美意識をもってしても、およそ美人とは呼び難いものと思われる。適度なプロポーションで描かれているのは残る2点のみ（4と12）である。

こうして見ると、本書はブルーマー服を擁護するかのごとき体裁を取りながら、その実、ブルーマー服姿の中に見いだした女性の様々な野心を揶揄するために、架空の筆名と肩書きを用いて著された、巧妙で痛烈な風刺の書とみることができる。

図は「街の無人販売の愛飲酒」　（能澤）